

徳富蘇峰『人物管見』論

——人物評論と同時代の文学論——

吉岡 亮

要旨 『人物管見』は同時代において新しい人物論として受容されていた。それは、内容的な面で従来の人物論と異なるものであったことと共に、人物論をめぐる言説を蘇峰が提示し、その影響圏において『人物管見』が読まれたためでもあった。また、山路愛山は蘇峰の人物評論の方法を文学史に援用していた。さらに、民友社の言説においては、史論や人物評論と文学・小説を差異づける複数の分割線が形作られていた。

はじめに

本共同研究のテーマ「歴史叙述と文学」と、私のこれまでの研究及び本論とのつながりを述べることで、本論の導入としたい。

私はこれまで明治前半期の歴史と文学の関係についていくつかの側面から検討を加えてきたが、その中で明治一〇年代後半から明治二〇年代前半にかけて、伝記が歴史と文学の接点として問題化されていたことに着目してきた。そこでは、西欧の文明史の影響を受けて、これまでと異なる歴史叙述のあり方が模索され、その一つとして、文明的な観点から把握された全体史と個人史を公正な批評によって連結する方法が注目されていた⁽¹⁾。そして、こうした歴史改良論を踏まえて、小説性を積極的に移入した伝記や、歴史叙述を含み込んだ小説などが相次いで発表され、歴史と小説、あるいは、伝記と小説の差異が改めて問われることとなったのである⁽²⁾。

本論はこうした歴史改良論のその後の展開を徳富蘇峰のテクストに探る試みである。後に見るように、明治二五年前後に、新しい伝記の試みが各所で出始め

ているという認識が文学をめぐる言説の中で広がっていくが、そうした新しい伝記の早くからの実践者の一人とされていたのが蘇峰であった。そして、蘇峰のテクストはその後民友社から刊行された様々な歴史叙述や伝記に大きな影響を与えていくこととなり⁽³⁾、歴史と文学の関係性を新たな形で問うことにつながっていくのである。

本論はこうした構図を念頭に置きながら、明治二五年に民友社から刊行された徳富蘇峰の『人物管見』を取り上げ、その特徴と、それが同時代の言説に与えた影響を考察していく。ここでは『人物管見』の概要を説明しておきたい。このテクストは、蘇峰が『国民之友』に発表した人物論をまとめたもので、国民叢書の第二冊として出版された。掲載されている人物論は全部で一四編あり、発表年次毎にまとめると以下のようなになる⁽⁴⁾。なお、テクストの掲載順もこの順序になっている。

■明治二十一年、「明治の二先生 福澤諭吉君と新島襄君」(『国民之友』三月、第一七号、以下号数表示は全て『国民之友』、「三島通庸君」(十一月、第三三号)

■明治二二年、「森有礼君」(二月、第四二号)、「板垣退助君 政治家の徳義」(四月、第四七号)

■明治二三年、「政界の三隠居 大隈、伊藤、井上三伯」(一月、第七〇号)、「明治年間一種の人物 鳥尾子爵」(四月、第七九号)、「新島先生没後の同志社」(四月、第七九号)、「文字之教」を読む 文学者としての福澤諭吉君」(四月、第八〇号)、「山縣伯に與ふるの書」(六月、第八六号)、「徳川武士の典型 沼間守一君」(七月、第八七号)、「矢野文雄氏」(八月、第九〇号) ■明治二四年、「元田東野翁」(二月、第一〇九号)、「板垣伯に與ふるの書」(四月、第一一四号)、「君子国の真君子 中村敬字翁」(六月、第一二二号)

「政界の三隠居」の「井上」は井上馨、「明治年間一種の人物」の「鳥尾」は鳥尾小彌太、「山縣伯に與ふるの書」の「山縣」は山県有朋を指している。山路愛山の「人物管見を評す」⁽⁵⁾に従えば、『人物管見』が刊行された明治二五年五月の時点で「現存するもの」は、福澤・板垣・大隈・伊藤・井上・鳥尾・山県・矢野であり、それ以外が「故人に属する者」であった。そうした違いはあるものの、取り上げられている人物のラインナップと各評論の題名から、『人物管見』が同時代の思想家(啓蒙家)や政治家を取り上げ、その議論の特徴や資質、明治の社会に与えた影響等を分析したもので、列伝的な同時代史の試みとも呼び得るようなテキストであることが分かるだろう。

さて、では、『人物管見』は同時代にはどのようなテキストとして読まれていたのだろうか。また、その作者である徳富蘇峰はどのように位置づけられていたのだろうか。第一節では、そうした同時代における『人物管見』の受容と蘇峰の位置づけの問題を扱う。第二節では、山路愛山「明治文学史」を取り上げ、『人物管見』の影響を検証したい。第三節では、同時代の文学論の中での伝記の位置づけを見ながら、『人物管見』の受容をより広いコンテクストの中で検討していく。

第一節 同時代評から見た『人物管見』と徳富蘇峰

新聞や雑誌に掲載された同時代評を見ながら、『人物管見』がどのようなテキストとして読まれていたのかを検討してみたい。

『早稲田文学』⁽⁶⁾の同時代評は、『人物管見』を「我国に於ける人物評の率先者にして有益なるもの」とし、その論評には「不義を悪むこと蛇蝎の如く正を踏みて恐れざる勇を美とする主義」が一貫していると述べる。その上で、「空漠たる理論に泥まらずして実践実行に重きを置き」、「引喩比喩の自在にして雅俗を選ば」ず、「觀察の機慧穿細にして擒縦如意なるが如き」といった特徴は、マコーレーの評論に似ており、この書を「漢学ぶりの人物品評に束縛せられたる者」が読んだとするならば、「塑像を觀たる後に活人を看る思ひ」がするであろう、と述べている。

『早稲田文学』の言う漢学ぶりの人物品評とは、おそらく、「勸善懲惡のないし大義名分的歴史」⁽⁷⁾に基づいた人物論を指しているだろう。それは、例えば、山路愛山が「漢儒の史」の悪しき傾向の一つとしている、「古人」を「道德的の見解」という「一定の模型にはめて其之に應ずるや否を見て直に之を是非せんとする」もので、「曰く彼は姦雄なり、曰く彼の事は篡奪なり、曰く彼は義人なり、彼の戦は義戦なりと、見る所正にあらざれば即ち邪のみ」⁽⁸⁾とするような人物論であった。

「人物管見」は実に人物論中の尤も精刻奇警たるものなり」とする『青年文学』⁽⁹⁾は、『早稲田文学』が触れていたマコーレーと共に、カーライルの名も引き合いに出しながら、「マコーレーありてミルトンの名一段高く、カーライルありて、クロムウエルの豪色を望むべし、民友記者の人物論に於ける亦た此の如きのみ」と述べる。その上で、「社会に於ける有力者の品位、特性、主義、勢力を評論した」『人物管見』の特質は、人物の「失行」を強調する一般の人物論に対して、「其の得所の一事に尤も痛快に評論し尤も丁寧で紹介」する「積極的の傾向」にあると指摘している。

『青年文学』が指摘する、失行よりも得所に重点を置いているという点は、『郵便報知新聞』の同時代評⁽¹⁰⁾でも触れられており、『人物管見』の一つの大きな特徴として捉えられていたことが分かる。

「はじめに」でも指摘したように、明治二五年前後に、これまでとは異なる新しいタイプの伝記がはじめて出ているという認識が広がっていたわけだが、マコーレーやカーライルの名はそうした新しい伝記の特徴を表現する際によく引き合いに出されるものであった。明治二六年から刊行が始まる民友社の十二文豪の一冊目が平田久『カーライル』であり、二冊目が竹越与三郎『マコーレー』であったのは、こうした同時代の認識を前提として、このシリーズの伝記としての新しさを印象づけるためであったと考えることができる。

そして、そうした新しい伝記の比較対象となったのが小説であった。『東京新報』の同時代評は、蘇峰は「所謂小説家を以て居らざる人」であるけれども、「微言微行を爬羅して（中略）之を文の舞台〔に〕上ほせて言はしめ動かしめ之を活現せしむるの手腕」は見事であるとする。その上で、『人物管見』を読むと、「残忍大入道の如きもの現れ猾智三成の如きもの出で清盛あり重盛あり大法師あり子平公あり」と、多種多様な人物が「皆一目の中に跳躍翻々するような感慨を抱くのであり、まさに「好院本好小説」と評することができると述べている⁽¹¹⁾。『東京新報』の記者は、蘇峰の人物を描き出す手腕を小説（家）を引き合いに出しながら賞賛していたのである。

『人物管見』は、従来の伝記や人物論とは異なる、マコーレーやカーライルの評論を連想させる新しい人物評論として受け取られていた。その大きな特徴は、実践実行に重きを置き、その長所を強調しながら、対象とする人物の社会への影響を重視する積極的な傾向にあった。また、蘇峰の人物に対する観察は繊細で機知に富んでおり、人物を描き出す手腕は小説家を思わせるものがある。同時代評では『人物管見』はそのように意味づけられていたのである。

ところで、こうした『人物管見』のあり方を踏まえながら、人物評論家として

の蘇峰について論じているのが、国木田独歩「民友記者徳富猪一郎氏」であった⁽¹²⁾。独歩は、明治前半期の歴史を政治的開国、社会的開国、精神的開国という三段階の推移によって説明し⁽¹³⁾、それぞれを代表する人物として伊藤博文、福澤諭吉、徳富蘇峰をあげる。そして、蘇峰が主唱する「平民主義」は、「欧州文明の根底に鬱勃せる」「基督教的道念の活火」を日本に移入し、精神的開国を確かなものとするための「新標幟」なのであり、その人物評論は平民主義を「生ける人間の精神」に定着するための試みとして位置付けることができる、と独歩は述べている。

その上で、独歩は、人物評論家としての蘇峰が有している優れた能力として、「精到深射の眼光」「直覚力」「寛裕同感の胸懐」の三つをあげる。精到深射の眼光は、人物の「秘密を看破」し、評論する人物を「躍々活動」させることを可能にする。また、「其の見し時は則ち感ぜし時にして、感ぜし時は則ち看破せし時」であるような直覚力により、「零碎の事実」であっても人物論を記すことが可能となっている。ただ、この直覚力に頼りすぎるため、蘇峰の人物論は「事実の捨捨」や「推論に尤も大切な帰納」を欠くこともあり、「人物を評すにあらずして、弄するに至り、謹厳なる人物論と云ふよりも巧なる小説となるに至る」場合もあると独歩は指摘する。

さらに、寛裕同感の胸懐は、「實在の人物を評して、過去の人物には歴史上に眞正の価値あらしめ、現今の人物には社会経済の上に於て適當の地位を得せ」しむることを可能にする。なぜなら、それが「小説中の人物」と異なる「實在の「人間」を描くことを可能にするからである。小説では「盜賊は飽くまで盜賊となし、悪漢はどこ迄も悪漢となし、愚物は何事にも愚物と為す」。しかし、例えばヴィクトル・ユゴーのように「眞人間」を描写するの技倆」があるならば、彼等にも「涙あり、血あり、情あり、信念あり、至誠あり、高貴あり恩愛ある」ことに気づかせてくれる。實在の人間を描くのであれば、なおさら寛裕同感の胸懐に裏打ちされた「眞人間」を描写するの技倆」が求められるのであり、蘇峰の人物論はそうした技量に基づいたものとなっているのである。

ここでも、先に見た同時代評と同様に、人物評論の比較対象として小説が取り上げられていることに注意したい。それを確認した上で、ここで着目したいのは、独歩が指摘している三つの能力全てが『人物管見』の序文で人物評論家に必要な資格として記されている点である。蘇峰はそこで次のように記している。

人間を知るは容易にあらず、然れども亦た知らざる可らず、如何にして知る(中略)直覚の心意、精到深射の眼識、寛裕同感の胸懐、及び謹嚴周匝なる事実の拮据、濶大包括なる四囲の觀察の如きは、最も必要な資格に相違なき也。然れども此の資格を具備したる評論家果して幾人かある、独り此の資格に於て闕如「し」たるのみならず、動もすれば執一の法を以て、錯雑なる人間を律し、既成の偏見に抛りて、靈變の人心を断じ、之に加るに愛憎を以てし、甚だしきは同感と反感とを以て唯一の基準となすに到る、嗟呼人物論評の恃むに足らざる此に於て極る。

独歩がこの序文を踏まえて「民友記者徳富猪一郎氏」を書いていることは明らかだろう。また、先に見た『早稲田文学』の同時代評でも、右の引用文中にもある「觀察」という語が使われていた⁽¹⁴⁾。ここから分かるのは、蘇峰が、新しい人物論の先駆的な実践者であっただけではなく、それを意味づける枠組みや、それを書く人間の主体的な条件を示していたことであり、同時代においてそれらが非常に大きな影響力を持っていたことである。蘇峰は人物評論の実例とそれをめぐる言説の両方を提示し、『人物管見』の同時代評や独歩の論文はその影響圏において書かれたものだったのである。

ところで、右に引用した『人物管見』の序文で否定的に言及されている「執一の法」や「既成の偏見」を唯一の抛り所とする人物論に対して、蘇峰は同じ序文の中で次のような認識を提示していた。「人間は一個の小宇宙なり、若し宇宙經濟に於て撞着の勢力、活動と反動あるを見は、其の模型より打ち出したる人間に於て亦た其の然るを期せざる可らず」。この部分は独歩の論文でも寛裕同感の胸

懐を支えている蘇峰の「信仰」として引用されている。独歩は、この部分に加え、蘇峰の「衝突、撞着」⁽¹⁵⁾という論文から二箇所を引用し、蘇峰の認識をさらに詳しく説明しようとしていた。ここでは、「衝突、撞着」の一方の引用部を見てみたい。

夫の英雄豪傑なる者は、人間てふ一個の器械中にて、其の他に比して最も錯綜し居る機関たるを忘る可からず。凡そ發達したる者に限りて其機関も緻密繁雑となるは事物の理固より然るなり。故にかの英雄豪傑の如きは、其性質に於ても決して単一の性を有する者に非ず、彼等の性質には不同あるべし、変化あるべし、否寧ろ反対あるべし。彼等の一方に於ける過度の働きは、必ず他方に於て之を救ふべき程の反対の働きあるを要するが故に、彼等の生活には恰も此反対の性質を必要とする者あり

一人の人間には「撞着の勢力」「活動と反動」「不同」「変化」「反対の性質」といった複数的な力が共存しており、それらを的確に捉えるには、従来の人物論や伝記が抛り所としている単純な価値基準は退けなければならない。『人物管見』の序文と合わせて考えると、独歩が注目していたのが蘇峰のこうした認識であることが分かる。そして、蘇峰の人物評論の新しさは、単純な人間観に基づく従来の伝記／右のような人間観に基づく新しい人物評論という、蘇峰自身が提示していた枠組みを前提として見出されたものでもあったのである。

第二節 山路愛山「明治文学史」と『人物管見』

『人物管見』には福澤諭吉を論じた評論が二編収録されている⁽¹⁶⁾。一つは「明治の二先生 福澤諭吉君と新島襄君」で、ここでは福澤と新島は「明治年間教育の二大主義」を代表する人物とされ、福澤は「物質的知識の教育」を、新島は「精神的道徳の教育」を主導していたとされている。

さて、ここで取り上げたいのは、『人物管見』のもう一つの福澤論、「文字之教」を読む。文学者としての福澤論吉君である。その冒頭で蘇峰は次のように述べている。

新日本文明の、福澤君に負ふ所のものは、既に世人の識認したる所、今更ら繰返す迄もなし。日本文学の福澤君に負ふ所に至りては、世人或は之を認めたる者あり、然れどもその多数は、曾て之に頓着せざるもの、如し。其の然る所以のものは何ぞや、世人が只福澤君に経世家——福澤君の常に自ら好んで称する——として之を見、未だ文学者として之れを見るもの鮮きに由るのみ。されど経世家として、必ずしも文学者ならざるに非ず、文学者として、必ずしも経世家たらざるに非ず。否、文は道を載るの器なり、経世家が天下を導くに於て、欠く可からざるの利器なり。文士必ずしも悉く経世家に非ざれども、経世家往々文士たる所以のもの、固より是に存す。

蘇峰は、経世家と文学者の両方の役割を担った人物として福澤を捉え、「文字之教」を事例としながら、その文学者——「新日本文学改革の喇叭手」であり、「平民的文学」の「盛運を啓きたる者」——としての側面をクローズアップしようとしていたのである。

福澤の文学者としての「特色」として、蘇峰は次の五点をあげている。第一に「措辞警策ありて、毎に一種の気魄を吐」⁽¹⁾ いていることで、「尋常の文句」も福澤が用いると「忽ち警語となりて異味を読者に与ふる」ものになる点である。第二に「例」や「譬」「趣向」を「手近」なところから引いてくる「直截」さがあり、これは福澤の「脳髓」が常に「実体的」に働いたためである。第三に、その文章が「非常の事を通常に云做す」点であり、第四に「極めて厳肅なるものを、極めて可笑しきものと比較」する等、文章全体が「不釣合」によって貫かれている点である。第五に「その議論重困の裡に陥る時に於て、忽ち一条の活路を看出し」「一層を進むる」という、「死中活を覓むる」とでも呼ぶべき議論の方法があり、

福澤の議論が常に「透徹」したものであるのはこれを活用しているからなのである。

さらに、蘇峰は、福澤の「独歩の技倆」として、その文が「諧諷」「頓智」「諷刺」「嘲笑」を含んでいることをあげる。そして、例えば、その「嘲笑的特色」は、「旧日本破壊、新日本建設の当時に於て、迷溺せる人種を快醒解悟せしむるに於て、実に一大利器」であった、なぜなら、そうした場合、「萬斛の涙を流して之を説諭する」よりも「嘲笑を以て之を笑倒する」ほうが「効用」が多いからだ、と蘇峰は述べている。

結論部においては、福澤の文章が極めて「人情」に近いこと、それゆえ福澤は「普通人民の代言人」と言い得る存在であること、福澤の「文章」と「事業」が「天下に独歩する」ものであったのは、その言葉が「人情の極所」、すなわち「人の容易に面に表はさずして、亦常に片時も遺れざる所の極所」を刺すからだ、といった指摘がなされている。

常に実体的なものから発想するが故にレトリックは直截的なものとなり、その文の嘲笑的特色や人情に近いという点が時代的な特質と相俟って大きな影響力を発揮していく。蘇峰はそのような形で、福澤の資質や発想法とその文体やレトリック、そして、社会への影響力の大きさが切り離しがたく結びついていることを指摘していたのである。

こうした蘇峰の方法を文学史に活用しようとしていたのが、山路愛山「明治文学史」⁽²⁾であった。愛山はその「凡例三則」の第二で「吾人が所謂文学なる者の積義」として、文章は「思想の活動」であり、「思想一たび活動すれば世に影響する」と述べ、北村透谷に批判された「文章即ち事業なり」という定義を再度持ち出している。また、その第三「批評とは何ぞや」では、批評とは「愛憎の念を挟み、妬評、諛評、悪言罵詈を逞くし。若くは放言高論高く自ら標し、己を尊拝して他人を卑しむ。胸中自家の主義を定めて人を上下するが如き者」、あるいは単に「他人を是非する者」ではない。批評とは「正しく他人を画」き、「人の

内観的記載」となるものであり、「人の外観的記載」にとどまる「伝記」とは異なるものである。愛山はこのように述べた上で、田口卯吉と福澤諭吉の二人を論じていく。

文章即ち事業なりという定義、及び、それを体現した文学者として福澤をあげている点は、福澤を経世家であると同時に文学者でもあるとする蘇峰の視点に通じるものであるだろう。また、愛山が列挙している批評とは呼べないものは、前節で見た『人物管見』の序文における人物評論の資格を欠いたものと共通している。愛山は、蘇峰の人物評論を念頭に置きながら、それを文学史という枠組みの中で援用しようとしていたのである。

そのことは具体的な分析を見ていくとさらに明らかになる。ここでは、田口卯吉についての愛山の考察を見ていきたい。

「田口卯吉君と其著述」と題された章で、愛山は田口の特徴として、「玲瓏なる理解力」「数学的の脳髓」「何者をも見通さざる敏捷」「真面目」「自信」「精細」といった点をあげている。

愛山によれば、田口の「堅硬なる思想」は玲瓏なる理解力によって生み出されている。それは「世の文学者」の「錯雑して前後衝突し論理的に之を煎じ詰れば結局空論」となるような思想とは異質なものである。数学的の脳髓は、「条理整然」とした彼の文章からうかがうことができるが、田口はそれを「幕府天文方の吏」であった父親から受け継いだ。何者をも見通さざる敏捷は、「其眼に触るゝ物を以て、直に自家葉籠中の材」とし、それを活用する能力であり、田口の読書や知識は「読書のための読書、知識のための知識」⁽¹⁸⁾を否定するものとなっているのである。また、真面目と自信は、「特立独行」し、「其議論を固守して」「容易に他人に雷同」しないという、田口の今日の文壇におけるポジションを作り出したものである。そして、田口の作る統計表や年表を見れば、彼の精細さをうかがうことができる、と愛山は述べている。

右の概要からも分かるように、愛山は、田口の特筆すべき能力や資質をキーワード化してあげた上で、それらを彼の個人史や思想的なあり方、あるいは、物事

の分析手法や文壇におけるポジションなどと関連づけていくことで、田口の人物像を描き出そうとしていた。それは、「脳髓」という同じ用語を使用していることにも端的に表れているように、先に見た五つの特徴から福澤を分析していく蘇峰の方法を援用したものであった。

こうした分析の後、愛山は田口の『経済雑誌』が明治一〇年代後半に「世上に歓迎せられたる理由」として以下の二点をあげる。それは、第一に、明治初年に洋学者が紹介した経済論における「放任主義」と「自由貿易論」を、田口が的確に把握し、それらを上手く「事実に応用」したからである。第二に、明治初年の政府は、経済の面では「政府万能主義の実行者」で「勸業の事に心を用」いていたため、「上の好む所下之より甚しき者ありて地方官の如きは往々民間の事業を奪ひて之を県庁の事業とし以て大官に諂はんとする者」が多数いるような状況であった。『経済雑誌』の「批評的、破毀的の議論」はその弊害をよく捉えていたため、人々は好んでそれを読んでいたのである。先に見た蘇峰の福澤論と同様に、愛山もまた、田口の発想法や議論の特徴をあげ、それらが時代的な特質と相俟って社会に大きな影響を与えていたことを指摘していたのである。

さらに愛山は、田口卯吉の史論の欠点として、「余りに因果づくめ」であるため人物に重きを置いていない点、人物を描いたとしても「同感の情」が少ないため、「英雄」を写し出すことができず、「平凡の人物」ばかりになってしまっている点をあげる。そして、「人物論は論理学の為し能ふ所に非る也（中略）人を知るの最もなる道は直覚なり、同感なり、詩人的の識認なり、不幸にして彼れは之を欠けり」と結論づけている。こうした人物論者に必要な資質の指摘にも、蘇峰からの影響をうかがうことができる。

それでは、なぜ愛山は文学史に人物評論の方法を取り入れようとしていたのだろうか。周知のように、明治前半期には日本の文学史を記す試みがいくつか出始めていた。その代表が明治二三年に金港堂から刊行された三上参次と高津敏三郎による『日本文学史』であるが、その他にも同じ年に金港堂から出された関根正

直『小説史稿』や、明治二五年に博文館から出された大和田建樹『和文学史』などをあげることができる。こうした文学史の試みに対して、内田魯庵は「文学研究に就ての注意」⁽¹⁹⁾で次のような批判を行っている。

まず、「文学は時代と直接の関係を有す」るものであるにもかかわらず、現在の文学の研究では「製作品の上に於て文致を評し趣味を論ずる」にとどまり、時代の研究は全く行われていない。時代の研究とは「当時の世態人情」を研究することであり、それによって、例えば、特定の思想がなぜ生じたのか、それがどのように変化したのか、あるいは、ある主義や特定の人物がなぜ大きな影響力を有していたのかを理解できるようになる。文学史はそうした事柄を明らかにしながら、社会が「進化変遷」していく様子を描き出すものであり、時代の研究を度外視するのは「無法」も甚だしい。魯庵はこのように述べ、三上参次・高津敏三郎の『日本文学史』もこの欠点を免れておらず、関根正直や大和田建樹の文学史に至っては言うまでもない、と批判している。

さらに魯庵は「文学者たる人物の研究」の必要性も訴えている。ある人物の思想の「胚胎する処」を詳しく知ろうとする場合、当然、「其生涯を考査する」必要がある。さらに、「人物」と「製作」は不即不離の関係にあるものなのだから、両者を「併観」してその関係を明らかにしなければならない、と魯庵は述べている。

時代と作者と作品という切り離しがたい三者を有機的に関連させながら、文学の時代的な展開を描き出し、それによって社会の変遷を明らかにするもの。魯庵の理想化する文学史はそのようなものであるわけだが、こうした議論の存在を念頭に置くと、愛山が文学史に人物評論を取り込もうとしていた理由が分かる。愛山は、蘇峰的な人物評論の方法を用いれば、同時代の文学史に欠けている、時代・作者・作品という三者の相互の関連を上手く描き出すことができると考えたのである。愛山が蘇峰の方法を律儀なまでに踏襲していたのは、そうした可能性を人物評論に見出していたからであった⁽²⁰⁾。

第三節 伝記と小説

明治二五年一〇月の『早稲田文学』第二六号の「史伝、人物評」と「批評界」という二つの記事に着目してみたい。どちらも「文界彙報」欄に掲載されたものである。

「史伝、人物評」は、近頃の文学界では「古今東西の偉人を捕らへ来りてこれが解剖評論を試ること」が流行しているとし、その具体例として、『国民之友』や『国民新聞』に掲載されている塚越停春の「徳川家康」、徳富蘇峰の「吉田松陰」、山路愛山の「平民的短歌の発達」や「歴史家としての新井白石」、『女学雑誌』の星野天知と北村透谷の文壇上人論や天知の兼好論などをあげている。その上で、世間はこうした人物評論の「看破徹底の明無きを笑ふ」が、「マコーレー、カーライルの炯眼の評」でも「彼等が眼中に映じたる人物の影」を論じたものに過ぎないのだから、右のような「人物評の稽古」を非難すべきではない、と述べている。

一方、「批評界」と題された記事では、近年の批評の変化が話題となっている。すなわち、これまでの批評家は「今人の新著」の「文章結構を是非し篇中の人物の性質、其の著全体の理想」などを論ずることが主であったが、最近の批評家は「古人の著書」を取り上げ、「書中の人物の性行を分析し之れによりて著書の理想を知り併せて著者の為人を知らん」ことを目的とするようになっていく。そして、こうした傾向の実例として、近松門左衛門の世話物を分析した評論や、「史伝、人物評」で例示されている「古書を批判し古人を論評したる文章」、さらには、透谷の「処女の純潔を論ず」や天知の「江戸城下の奇児」などをあげ、これらが蘇峰の人物評と田口卯吉の史論に影響を受けたものであると推測している。その上で、こうした「人物の研究」の流行は現在の文壇が「人間の観察に傾心せんとしたる証」であり、こうした現象が続けば、「活眼の批評家」が生まれ、近松西鶴馬琴等の「文学者としての価値」や「人間としての価値」を明らかにしてくれるであろうし、「大技倆ある作家」が生まれ「甚深微妙なる人情の秘

密蔵を描破する」日も来るであろう、と述べている。

右の記事で触れられている近松の世話物を分析した評論については、この二ヶ月前の『早稲田文学』第二二号の「時文評論」欄の「近松浄瑠璃の分析」という記事で取り上げられている。そこでは、近松の作品は、これまで主に時代物に注目が集まっていたが、近年その世話物を称揚する者が増えている点、そして、その分析方法についてもこれまで見られなかったような「分析的批評」が増えているという指摘がなされている。

『早稲田文学』のこうした記事は、「はじめに」で指摘した明治二五年前後の新しい伝記の試みに関する議論の実例であるわけだが、注目すべきは、右の記事において、例示されたものをまとめ上げるネーミングが、「史伝」「人物評」「解剖評論」「人物評論」「人物の研究」「分析的批評」等、一定していないことである⁽²¹⁾。新しい伝記の試みを名指す言葉は未だ確定していなかったためであり、マコーレーやカーライルの名はその穴を埋める一種の符号として使われていたわけである。

そのことを一つ確認した上で、右の記事から分かるのは、そうした新しい伝記を主に実践していたのが、徳富蘇峰や山路愛山を中心とした民友社、北村透谷や星野天知など後の『文学界』派、そして田口卯吉であったことである。前節で見たとように、「明治文学史」で愛山は、「文章即ち事業なり」という定義を再度持ち出すことで北村透谷を牽制し、田口卯吉を人物論者に必要な資格が欠けていると批判していた。それによって、愛山は民友社の人物評論を正統化・卓越化しようとしていたわけである。

さらに、当時の民友社の言説に目を向けると、小説との対比において、人物評論の優越性を説く議論を見つけることができる。例えば「感服と憎悪——批評家を失墜す」⁽²²⁾と題された記事では、史論と山田美妙の歴史小説が、人物の批評という観点から比較され、後者が批判されている。すなわち、島田三郎が井伊直弼を論じた『開国始末』⁽²³⁾、三上参次が松平定信を論じた『白河楽翁と徳川時代』⁽²⁴⁾、十二文豪『新井白石』にまとめられていく山路愛山の『新井白石論』などは、

「初めより批評せんとて論賛した」ものではなく「唯感服して頌揚した」ものである。それに対して、美妙が豊臣秀吉を描いた『雪折竹（利休と大閤）』⁽²⁵⁾や、足利直義を取り上げた『丸二ツ引新太平記』⁽²⁶⁾は、「批評せんとて觀察したるにあらざるべし唯憎悪して痛罵したるなるべし唯夫れ感服したるのみ憎悪したるのみ」である。批評家は本来、「人物を事物の如く批評」しなければならぬ。美妙のように「恋人に対する如く感服し仇敵に対する如く憎悪」するだけでは批評家としての職務を放棄していると言わざるを得ない。「感服と憎悪」という記事はそのような形で、人物の批評という点では、美妙の歴史小説よりも史論の方がその役割を果たしていると主張していたのである。

そして、右の判断のベースとなっている区分に着目するならば、それが先に見た新旧の人物論を差異づける区分と重なるものであることが分かる。つまり、右の記事では、事物を扱うように人物を評するもの／書き手の感情や偏見を対象とする人物に直接ぶつけるもの、という区分が用いられているが、それは、蘇峰が提示していた新しい人物評論／従来の人物論という区分や、愛山があげていた、人の内観的記載としての批評／「愛憎の念を挟み」「胸中自家の主義を定めて人を上下する」ものといった区分と同様の視点によって編成されたものだったのである。

また、次のような議論もあった。

人の品性挙動に於て美術的なるを然らざるとあり。(中略)

勿論詩人の天才によりて、乾燥無味なる人物より多くの材料を得ることなきに非ず。觀察の如何に由りて、不美術的人物も美術的人物とならざるに非ず。然れども(中略)経世治国の偉図ある大人物、或は美術上に恰当せざること多し。漢の高祖は如何、徳川家康は如何、カヴールは如何、大久保利通は如何。吾人は此等の人物が、経世治国の略あるを知る。然れども、此等の人物は歴史に記し得べく、論評に適すべき人物にして、小説中に描き難きの人物なり。小説中の一客として一部分を描き得べきも、主人公として多部分を描くべからざるな

り。何となれば、其意思剛強にして感情を制するに余りあり、其善く謀り善く断ずるの手腕は。人をして畏るべく忌むべく憚るべく頼むべきの情を惹起さしむるのみにして、憐むべく愛すべく憫むべく悲むべきの情を惹起さしめさればなり。社会は陰陽剛柔両性にて維持せらるゝものにて、文学は固より柔性に属するものとすれば、小説中に硬性人物の不恰当なるも亦已むを得ざる所ならん歟。(27)

ここでは人物の表象という点で歴史と小説が同じ台座に乗せられた上で、その差異が問題化されており、歴史・論評／小説、不美術的人物／美術的人物、硬性人物／柔性人物、畏るべく忌むべく憚るべく頼むべきの情を惹起するもの／憐むべく愛すべく憫むべく悲むべきの情を惹起するもの、といったいくつもの分割線が提示されている。それらは「当今文学の急務は小説などの女性文学の外更らに伝論、史談、教訓、等の男性文学を盛ならしむるにある事」(28) という男性文学／女性文学という分割線とも重なり合いながら、歴史と小説、あるいは、歴史と文学の境界性をめぐる言説を形作っていくこととなるのである。

おわりに

『人物管見』は同時代において新しい人物論として受容されていた。それは、内容的な面でそれまでの伝記や人物論と異なるものであったことはもちろんであるが、その受容の枠組みや人物評論家としての資質といった、人物論をめぐる言説を蘇峰が提示し、その影響圏において『人物管見』が読まれたためでもあった。また、山路愛山は蘇峰の人物評論の方法を援用し、時代・作者・作品が有機的に関連し合った文学史を試みようとした。さらに、民友社の言説においては、そうした人物評論の実践とそれに関する議論を背景としながら、小説との対比における史論や人物評論の優越性の主張や、歴史と文学・小説を差異づけるいくつもの分割線が形作られることとなっていたのである。

本論の概要は以上のようになるが、以下、今後の課題を二点あげて、本論の結びとしたい。

第一に、第三節で見たような歴史と文学をめぐる言説に対する文学側の応答をどこに見出すかという点である。その点で言えば、例えば、同時代のドラマ論を念頭に置きながら、「個性と外界との複雑霊妙なる関係を描破する」ことを「脚本の精髓」として「史劇」を構想した、坪内逍遙の「我が国の史劇」(29) をそうした試みとして位置付けることができるのではないだろうか。すなわち、逍遙の史劇の試みは、小説では描きにくいとされた人物——第三節末尾の新聞記事の言葉を使えば「不美術的人物」「硬性人物」——を文学(美術)の枠内にもう一度回収していくものであり、民友社的な言説に対する対抗的な言説として捉え返すことができるのではないか。そうした仮説について稿を改めて検証してみたい。

第二の課題は、『人物管見』で数多く取り上げられている政治家に関する評論の系譜をたどる事である。本論では『人物管見』の福澤論を中心に取り上げたが、「はじめに」でも触れたように、『人物管見』には森有礼、板垣退助、大隈重信、伊藤博文、井上馨、山県有朋といった政治家を論じた評論が数多く収録されている。それらは、例えば、明治二十九年に民友社から刊行された今世人物評伝叢書(第一冊『山県有朋 附 渡辺国武、岡本柳之助』、第二冊『大隈重信 附 矢野文雄、大石正巳』、第三冊『伊藤博文 附 伊東巳代治、末松謙澄』や明治三〇年に同じく民友社から刊行された『森有礼』、さらには、鳥谷部春汀の『明治人物評論』(30) や『続明治人物評論』(31) などへと引き継がれていくものであるだろう。こうした政治家に関する評論の系譜についてもまた稿を改めて検討したい。

(注)

(1) 拙論「島田三郎『開国始末——井伊掃部頭直弼伝』——歴史・伝・小説——(前)(後)」(『国語国文研究』二〇〇二年一月、第二二二号、及び、二〇〇三年一月、第二二三号)。

(2) 拙論「明治二十年前後の〈歴史〉と〈小説〉——尾崎行雄『経世偉勲』と末広鉄

- 賜『雪中梅』を中心に——」（『日本文学』二〇〇三年九月、第五二号）。
- (3) 近年、明治前半期の徳富蘇峰の仕事の意味とその影響について、これまでとは異なる形で見直す試みが続いていくか出ている。その代表が木村洋『文学熱の時代 慷慨から煩悶へ』（名古屋大学出版会、二〇一五年）であり、特にその第1章「徳富蘇峰の文学振興」や第2章「経世と詩人論——徳富蘇峰の批評活動」で、同時代の文学の擁護者としての蘇峰の姿が鮮やかに描き出されている。また、谷川恵一「彼等の時代」（『国語と国文学』二〇〇八年七月、一〇一六号）は「明治二十年代は民友社の時代であった」とし、蘇峰を中心しながら民友社の言説の新しさを指摘している。この他、蘇峰の全体像の捉え返しを試みた杉原志啓・富岡幸一郎編『稀代のジャーナリスト 徳富蘇峰』（藤原書店、二〇一三年）等がある。
- (4) 題名は『人物管見』冒頭の「目録」から引用した。ただし、目録と本文の題名、及び、初出時のタイトルには若干の異同があり、本文の題名や初出時のタイトルと比べて、目録の題名が明らかな誤字と思われるものは訂正した。『国民之友』初出時と『人物管見』の本文を比べると、圈点の有無の違いや表現の部分的な変更は見られるが、大意に影響するような変更はない。初出のみにあり『人物管見』では削除されているものとして、以下の三つがある。①「文字之教」を「読む」に付けられている「文字の教」、「特色」、「独歩の技術」という小見出し、②「板垣伯に與ふるの書」に付けられていた「望教生」という署名のある短い前文、③「君子国の真君子」の前に付けられていた「故中村敬宇先生」と記された肖像画と真筆の写真。なお、本論における『人物管見』からの引用は全て再版（明治二六年二月）による。
- (5) 『女学雑誌』明治二五年五月、第三二九号「批評」欄。署名は愛山生。
- (6) 『早稲田文学』明治二五年五月、第一六号、「時文評論」欄、「人物管見」。
- (7) 小沢栄一「序章 課題と展望」一頁（『近代日本史学史の研究 明治編』吉川弘文館、一九六八年）。
- (8) 山路愛山「歴史家としての新井白石（二）」（『国民新聞』明治二五年八月一四日）。
- (9) 『青年文学』明治二五年五月、第七号、「評論」欄、「民友友の「人物管見」」。
- (10) 『郵便報知新聞』明治二五年五月三日。「凡そ国民之友記者の人物を評するや左手に盾を押し右手に剣を振り（中略）彼が弱処を突かず（中略）彼の尤も強処に向て刺す、強処已に敗るれば弱処は劣するを須みざるのみ、是れ記者が慣用手段……」。
- (11) 『青年文学』（明治二五年五月、第七号）と『国民之友』（明治二五年五月、第一五三号）に掲載された『人物管見』の広告から引用。広告によれば、この記事の書き手は原抱一庵。『東京新報』の原文は未見。
- (12) 『青年文学』明治二五年一〇月、第二〇号。署名は鉄斧生。
- (13) こうした独歩の明治史の把握が、『人物管見』にも収録されている。「明治の二先生 福澤諭吉君と新島襄君」を踏まえたものであるという点については、すでに木村洋が指摘している。木村は「民友記者徳富猪一郎氏」は蘇峰という対象を、蘇峰の認識の枠組み自体に依拠しながら論じており、独歩の視野が幾重にも蘇峰の主張に規定されていたことが分かる」と述べている。注(3) 木村前掲書「徳富蘇峰の文学振興」、四六頁〜四七頁。
- (14) 蘇峰は「観察」や「観察者」という言葉を独特の意味合いを込めて使用していた。その点は「文学者の目的は人を榮ましむるにある乎」（『国民之友』明治二二年一月、第三九号）や「観察」（『国民之友』明治二六年四月、第一八六号、後に『静思余録』（明治二六年五月）に収録）等だろうかということが出来る。
- (15) 『国民新聞』明治二三年二月、第七二号。後に『静思余録』に収録。引用も同書による。
- (16) この二編以外でも蘇峰はたびたび福澤を論じており、例えば、『国民之友』明治二八年一二月、第二七五号には「福澤諭吉翁」（後に『漫興雜記』明治三一年一二月に収録）が、また、「瘦我慢の説を読む」（『国民新聞』明治三四年一月一三日）や「福澤諭吉氏を吊す」（『国民新聞』明治三四年二月五日）等もある（後者の二つの記事は後に『人物偶評』（明治三四年九月）に収録）。
- (17) 『国民新聞』明治二六年三月〜六月。
- (18) 平岡敏夫「山路愛山『明治文学史』」（『文学』一九六六年、二月・四月、後に『明治文学史』研究 明治篇（おうふう、二〇一五年）に収録）。
- (19) 『日本之少年』第六卷、第一二・一三号、明治二七年六月。署名は不知庵主人。
- (20) この点は北村透谷との人生相渉論争と関わる論点であるだろう。人生相渉論争に関する先行論文において、愛山に対する蘇峰の影響や、両者の認識の共通点等を論

ずるものは多くあるが、愛山の「明治文学史」と蘇峰の「文字之教」を読むや『人物管見』との関連を指摘しているものは管見の限りでは見当たらなかった。ただ、出原隆俊「人生相渉論争開幕の周辺」（『日本近代文学』第二八集、一九八一年九月）は、人生相渉論争の背景に、「繊弱」な文学に代わるものとして、「硬文学」である史論、人物論」を提唱する側と、「文学への史論の導入を、「事実に使は」れるものとして批判し、「詩想」を重視」する側があり、愛山と透谷の議論の差異が両者に対応するものであったこと、そして、後者の側が少数派であったことを指摘している。本論はこうした出原が提示している構図を前提としながら、蘇峰の人物論の影響力を重視する形でそれを捉え返していく試みである。

(21) 谷川恵一は「伝記と歴史の間——幸田露伴のスタイル——」（『歴史評論』二〇一五年一月、第七七七号）において、こうした新しい伝記が、「西欧の言説との接触到よって日本にもたらされた、従来の伝記に収まりきらないものを抱え込んだ新たな言説のスタイル」であったこと、そして、それらが蘇峰の『吉田松蔭』の圧倒的な成功によって、「評伝」や「人物評論」という新設の「ジャンル」として「その市民権を獲得」していったと述べている。

(22) 一一生「秃筆録」（『国民新聞』明治二五年三月二七日）。

(23) 明治二二年三月、與論社。

(24) 明治二四年九月。

(25) 「国民新聞」四七五号〜四八四号、明治二四年七月。

(26) 春陽堂、明治二四年一月。

(27) 一一生「美術的人物」（『国民新聞』明治二五年七月一七日）。

(28) 高臥生「文学管見一二」（『国民新聞』明治二五年三月二七日）。

(29) 『早稲田文学』明治二六年一〇月〜明治二七年四月。引用は『梨園の落葉』（春陽堂、明治二九年一月）による。

(30) 博文館、明治三一年一月。

(31) 博文館、明治三三年六月。

* 附記 引用に際しては、原則として旧字は新字に改め、ルビ・記号等は適宜省略した。また、脱字と考えられるものについては「」を付して補った。